
愚痴の子ぐっちゃん

千嶋桂華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚痴の子ぐつちゃん

【Nコード】

N8958R

【作者名】

千嶋桂華

【あらすじ】

愚痴ばかり言ってる子は、本当に愚痴しか言っていないのか、という疑問。

ぐっちゃんは一人

「愚痴って、何だろう。」

そうこぼしたのは、ぐっちゃんと呼ばれる子だった。
いつも愚痴ばかり言ってるから、ぐっちゃん。
いつも愚痴ばかり聞いているから、ぐっちゃん。
愚痴の子、ぐっちゃん。

「愚痴？」

「うん、愚痴。」

愚痴の子が、愚痴とは何かと聞いてくる。
ふむ、変な感じた。まあ答えてやるか。

「えーと、どうしようも無いことをぐだぐだ一人語りすること？」
「結構ひどいこと言うね、君。」

しかも微妙に間違ってるし。
いつもの口調で、ぐっちゃんが愚痴る。

ぐっちゃんは、人を名前で呼ばない。名前を知らないわけじゃない
みたいけど。

ぐてんと机に突っ伏していたぐっちゃんは、ため息をつきながら
床に向かってずるずると落ちていった。
地べたリアンか。華も恥らう女子高生がみつともない。

「危ないよ、ぐっちゃん。」

「うるさいなあ。これだから君らは嫌なんだ。」

あ、また愚痴った。

「何で嫌なのよう。」

「だって君らいつも僕のこと為すこと全部文句言っじゃなか。」

む、あくまで自分は被害者か、この野郎。

「君らって僕のこと変人とか思ってるだろ。」

「え、ぐっちゃん変人じゃん。」

「うわひど。君の方こそ変人だよ、人を傷つけることを厭わない。」

別に傷ついても無いくせに、ぐっちゃんは時々こういうこと真顔で言う。

その小さな口をにゅーっと突き出して、自分は被害者だーって棒読みで言うんだ。

誰も信じないよ、そんなこと。

どうせ被害者ぶるなら、その大きな目とか綺麗な髪とか使って、最大限努力すればいいのに

ぐっちゃんは何もしない。ただ愚痴るだけ。

そう、愚痴るだけ。

「ぐっちゃんって、人の名前覚ええないよね。」

「急な話題転換の上に、何の誤解だよ、それ。」

「だって、ぐっちゃん人のこと名前で呼ばないじゃない。」

ぐっちゃんは人の名前を呼ばない。いっつも「君」とかで済ます。

私達は、ぐっちゃんって呼んであげてるのに。

そういうと、ぐっちゃんは地べたで寝転がっていたその細い上半身を起こして

じつとこちらを見た。

まるで、私の中身を見極めるように。

「何よう。」

「・・・別にい？」

ぐっちゃんは目を閉じアメリカンに首を振ると、汚れたスカートを手で払いながら立ち上がった。

「名前ねえ。」

「ねえねえ、名前言ってみてよ！私の！」

につこり笑って私が言つと、またもやぐっちゃんは私を見つめそしてその細い指をビシッと私に突きつけた。

「けえちゃん。」

「は？」

「化粧のけえちゃん。」

「はあ？」

た、確かに化粧は多少厚いけど！でも私標準レベルなのに！何この子。

ぐっちゃんは言い切ると、そのまま素早く踵を返した。まるで、言つべきことは何も無いかのように。

「ちょ、ちよつと！」
「.....」

その時振り返ったぐっちゃんの顔に、表情というものは何も無くちよつと和風な西洋人形って感じだった。

「君らもさ、呼ばないじゃん。」

私の、本当の名前。

それだけ言って、ぐっちゃんは教室から出て行った。
その日は、一日中欠課だった。

ぐっちゃんは友達が居ない。
だから、愚痴をいつも言っている。

私達は、友達と毎日下らないことを喋る。
親が勉強しろと煩いこと、隣のクラスの教師がウザったいこと
今日の授業が嫌だから無くなって欲しいこと、えとせとら。
これらは全部、世間話。

どうしようもないことをぐだぐだ語る、世間話。

一人語りじゃないから、世間話。
一人が足りだから、愚痴。

ぐっちゃんは、いつも愚痴ばかり言っている。
何故なら一人だから。一人だから。

ぐっちゃんは一人（後書き）

別に被害者ぶってるわけじゃなくて、ただ愚痴ってるだけなのにね。

じゃない

昔、ぐつちゃんがぐつちゃんでも無かった頃

遠足のハイキングの班が森の中で、一つ迷子になってしまった。

その班には、私もぐつちゃんも居て

私は確か、怖くてずっとぐつちゃんの袖を握っていたと思う。

そのうちだんだん周りは暗くなって、誰の声も聞こえない中

ぐつちゃんだけは泣かなかった。ただ立っていた。

「ねえ、助けを呼びにしようよ。」

「馬鹿。動き回ったら見つけてもらえないだろ、先生が言ってたじやねーか。」

「でもお。」

結局、皆が嫌だ嫌だというものだから

最終的にぐつちゃんと私が二人で助けを呼びに行く羽目になった。

私は怖くて辛くて、何で私が行かなきゃいけないのか分からなくて
終始ぐつちゃんに文句——いや、愚痴ばかり言っていた。

ぐつちゃんはそれら全てに、大丈夫大丈夫と答えていて

私は安心して愚痴っていた。

「ねえ・・・疲れたよお。」

「大丈夫だよ、もう少しだよ。」

「でもさあ・・・何で私達二人だけなの・・・皆はあ・・・？」

「大丈夫、大丈夫。ほら、あそこまで歩こうよ。」

それでも、私達は確実に疲れて行って

私はもう歩きたくなくなつて、座り込んでしまった。

「もう嫌だよお・・・」

「ほら、あと少しだから・・・。」

「全然少しじゃないじゃん・・・全然見つからないじゃん・・・！」
「・・・。」

「ねえ何で私達だけなの！？ねえ！！」

ぐっちゃんは、それまでちよつと疲れた顔をしていたけど
私が泣き出したのを見て、少し悲しそうな顔をしたあと
励ますようににっこり笑った。

「大丈夫だよ、本当にあとちよつとだから。」

「・・・。」

「歩けるところまで、頑張ってみようよ。」

「・・・。」

「歩けなくなったら、私が負ぶってあげる。」

思えば、ぐっちゃんのあんな微笑みを見たのはあの時だけだった。
まるでお母さんみたいに穏やかで、すべてを安心させる微笑だった。

結局、私達も班の皆も探しに来た先生たちに見つけてもらって
“勝手に”班から離れた私達は、結構なお叱りを受けた。

「班行動は絶対だと言っただろう」

「でも、せんせえ・・・。」

「でも何も無い。下手したら二人とも遭難してたんだぞ！」

ぐっちゃんは、無表情だった。

「ともかく、これは全部のことに言えることだが
集団と離れるような、勝手なことはするな・
嫌です。」

ぐっちゃんは、無表情に言い切った。

「今回のことは悪かったと思いますけど
何でも集団にあわせなきゃなんないって考えは嫌です。
私は、私の限界に合わせて歩きたい。」

先生も私も呆気にとられて、何もいえなかった。
このとき私は、ぐっちゃんは変な子だと認識した。

ねえ、ぐっちゃん。

人はね、普通の人は、自分の限界には合わせないんだよ。
大体自分の限界より、少し下かかなり下で、うろろしてるんだよ。
むしろ、限界ぎりぎりってのはちよっと危ういから嫌われるんだよ。
なんか格好つけてるみたいだね。

全く。そんな性格してるからぐっちゃんは一人なんだよ。
友達なんて出来ないよ？一生一人のつもり？
もう私知らないよ、ぐっちゃんのことなんて。

ある日、愚痴の子を見かけた。

愚痴の子は、いつものように一人で教室に入り

いつものように自分の席に座って本を読み出した。

いつもどおり単調な人。

しかし、今日は少し変更点があったようだ。

やがて幼馴染だというクラスの中でも人気者の少女がやってくると少女に頼まれた愚痴の子は、一緒に少女の宿題をやっていた。

愚痴の子は、今日は一人ではなさそう。

多分あの少女はしばらく一緒に居た後、またいつものメンバーのところに帰るだろうが

愚痴の子は、少女が居なくなっただ後でも孤独ではないだろう。だって彼女は、友達を見つけたのだから。

「ぐつちゃ・・・じゃなくて友香^{ともか}、ここ教えて。」

「・・・別に無理して呼ばなくてもいいんだけど。」

「私が決めたんだから呼ぶのお。友香も私の名前呼ぶのお。」

「えー・・・。」

「次『君』とか言ったら殴るからね!」

「んなバイオレンスな・・・」

「はい!リピートアフタミー?」

「いやいや、リピートする内容言えよ。」
「ほらほら早くう！」
「五月蠅いなあ・・・宿題手伝わないよ？」
「え、それは嫌！」
「じゃあさつさと片付けるよ・・・美咲」
「・・・！やつと呼んだあ！！」
「五月蠅い！はい、次この問題！」

じゃない（後書き）

蛇足的第2話。

いやあ、最初の話だけ短編でも良かったんだけど
ちよつと今日はハッピーエンドが欲しい気分だったので。

ちなみに、私の周りの女子高生の会話ってこんな感じ・・・じゃない。
い。

いや、美咲さんの喋り方する子は居るけど

ぐっちゃんの喋り方する女子高生は・・・まあ俺か。

君とか僕じゃないけど、こんな感じに男っぽいよ。

まあ部活内限定だけどな！

教室とかではおとなしい真面目な女の子演ってるよb

追記）人気者の少女「美咲さん」ってのは最初のほうからぐっちゃん
と話してた子です。「私」の子ね。

もうしらないとか言いながら、やっぱりぐっちゃんと友達に戻りた
かったんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8958r/>

愚痴の子ぐっちゃん

2011年10月8日12時25分発行